

複素ヒルベルト空間のブラ・ケットベクトルと行列のユニタリ変換

ベクトルにブラ・ケットの2種類があるため、実ユークリッド空間での座標とベクトル・テンソルの変換性（一つ上の講義メモ参照）を適用する際に注意が必要である。まず、基底系 $\{|e_i\rangle\}$ から $\{|e'_k\rangle\}$ への一次変換を与える、直交行列に対応するユニタリ行列 U の行列要素 $U_{ki} = \langle e_k|U|e_i\rangle$ を内積、

$$U_{ki} = \langle e'_k|e_i\rangle \quad (1)$$

で定義する。このとき基底の一次変換式は

$$\langle e'_k| = \langle e_k|U = \sum_i U_{ki}\langle e_i| \quad (2)$$

$$|e'_l\rangle = U^\dagger|e_l\rangle = \sum_j |e_j\rangle U_{jl}^\dagger \quad (= \sum_j U_{lj}^*|e_j\rangle) \quad (3)$$

となる。いずれも一見したところ趣の異なる2通りの書き方がされており、特に後の表式は行列演算ではなくベクトルの一次結合式であるが、それぞれ、右から $|e_i\rangle$ 、左から $\langle e_j|$ をかけてベクトルの展開係数を調べれば同じであることがわかる。直交性が維持されていることは以下のとおりである：

$$\langle e'_k|e'_l\rangle = \langle e_k|UU^\dagger|e_l\rangle = \langle e_k|e_l\rangle = \delta_{kl} \quad (UU^\dagger = I : \text{単位行列}) \quad (4)$$

このユニタリ行列 U を用いれば、状態ベクトル（波動関数）と物理量の行列

$$|\psi\rangle = \sum_i \alpha_i|e_i\rangle = \sum_k \alpha'_k|e'_k\rangle \quad (5)$$

$$Q = \sum_{i,j} |e_i\rangle Q_{ij}\langle e_j| = \sum_{k,l} |e'_k\rangle Q'_{kl}\langle e'_l| \quad (6)$$

は、新しい基底系で表した場合 に、それぞれ以下のように変換される：

$$\alpha'_k = \langle e'_k|\psi\rangle = \sum_i \langle e_k|U|e_i\rangle\alpha_i = \sum_i U_{ki}\alpha_i, \quad \text{すなわち} \quad \begin{pmatrix} \alpha'_1 \\ \alpha'_2 \\ \alpha'_3 \\ \vdots \end{pmatrix} = U \begin{pmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \alpha_3 \\ \vdots \end{pmatrix} \quad (7)$$

$$Q'_{kl} = \langle e'_k|Q|e'_l\rangle = \langle e_k|UQU^\dagger|e_l\rangle = (UQU^\dagger)_{kl} \quad (8)$$

すなわち、

$$\text{行列の変換：} \quad Q' = UQU^\dagger \quad (9)$$

以上のように、複素ヒルベルト空間の場合も基底の変換行列 U を (1) で定義すれば、実ユークリッド空間の座標とベクトル・テンソルの変換性と同じになる。実ユークリッド空間の変換では、 U_{ij} が実数だから、(2) と (3) の違いはない。

（物理量の回転）基底はそのまま固定しておいて物理量の方を変形（回転など）することを考える。物理量をユニタリ行列 U で、（注：上の (9) と同じ形であるが、基底は元のままである。）

$$\text{物理量の変化：} \quad Q' = UQU^\dagger \quad (10)$$

と変換するとき、変換の表式 (2) と (3) を用いれば、以下の等式が得られる：

$$\langle e_i|Q'|e_j\rangle = \langle e'_i|Q|e'_j\rangle \quad (11)$$

つまり、「元の基底系による Q' の行列要素」と「変換した基底系による元の Q の行列要素」は同じ形になる。ハイゼンベルグ表示とシュレーディンガー表示の同等性は、 $U = e^{itH/\hbar}$ と置くことに相当する。

例 量子化軸を $\mathbf{n} = (\sin \theta \cos \phi, \sin \theta \sin \phi, \cos \theta)$ 方向に選んだ場合のスピン

$$\sigma'_z = \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma} = n_x \sigma_x + n_y \sigma_y + n_z \sigma_z = \begin{pmatrix} \cos \theta & e^{-i\phi} \sin \theta \\ e^{i\phi} \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix} \quad (12)$$

は、回転のユニタリ行列

$$U = e^{-(i\phi/2)\sigma_z} e^{-(i\theta/2)\sigma_y} = \begin{pmatrix} e^{-i\phi/2} \cos(\theta/2) & -e^{-i\phi/2} \sin(\theta/2) \\ e^{i\phi/2} \sin(\theta/2) & e^{i\phi/2} \cos(\theta/2) \end{pmatrix} \quad (13)$$

を用いた変換

$$\sigma'_z = U \sigma_z U^\dagger \quad (14)$$

で与えられる。この新しい演算子 σ'_z の固有値 ± 1 に対応する固有ベクトルは、

$$\text{固有ベクトルの変化: } Q|q\rangle = q|q\rangle \text{ のとき } (UQU^\dagger)U|q\rangle = UQ|q\rangle = qU|q\rangle \quad (15)$$

により $U|q\rangle$ 、すなわち

$$|+\rangle = U|+\rangle = e^{-i\phi/2} \cos \frac{\theta}{2} |+\rangle + e^{i\phi/2} \sin \frac{\theta}{2} |-\rangle = \begin{pmatrix} e^{-i\phi/2} \cos(\theta/2) \\ e^{i\phi/2} \sin(\theta/2) \end{pmatrix} \quad (16)$$

$$|-\rangle = U|-\rangle = -e^{-i\phi/2} \sin \frac{\theta}{2} |+\rangle + e^{i\phi/2} \cos \frac{\theta}{2} |-\rangle = \begin{pmatrix} -e^{-i\phi/2} \sin(\theta/2) \\ e^{i\phi/2} \cos(\theta/2) \end{pmatrix} \quad (17)$$

となる。これは基底の変換に伴う列ベクトルの変換式 (7) と同じ形をしているので混同しがちであるが、そうではない。ベクトルの成分を決めている基底は、元の基底系 $\{|+\rangle, |-\rangle\}$ のままである。

これに対して基底のユニタリ変換の考えでは、(3) により新たな基底を以下のようにとればよい：

$$|e'_0\rangle = U^\dagger |+\rangle = e^{i\phi/2} \cos \frac{\theta}{2} |+\rangle - e^{i\phi/2} \sin \frac{\theta}{2} |-\rangle \quad (18)$$

$$|e'_1\rangle = U^\dagger |-\rangle = e^{-i\phi/2} \sin \frac{\theta}{2} |+\rangle + e^{-i\phi/2} \cos \frac{\theta}{2} |-\rangle \quad (19)$$

このとき、(8) の行列要素の変換式により、 σ_z はこの 新たな基底系 で (12) と全く同じ形の行列で表される。同時に σ_z の固有ベクトル $|+\rangle = (1, 0)^T$ 、 $|-\rangle = (0, 1)^T$ も、(7) により、当然のことながら 新たな基底系 $\{|e'_0\rangle, |e'_1\rangle\}$ で、上の (16)、(17) と全く同じ形の成分をもつ列ベクトルに変換される：

$$|+\rangle \rightarrow U \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} e^{-i\phi/2} \cos(\theta/2) \\ e^{i\phi/2} \sin(\theta/2) \end{pmatrix} \quad (20)$$

$$|-\rangle \rightarrow U \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -e^{-i\phi/2} \sin(\theta/2) \\ e^{i\phi/2} \cos(\theta/2) \end{pmatrix} \quad (21)$$

ここで、「新たな基底を $|+\rangle, |-\rangle$ にとったら σ_z はどう表されるか？」という疑問が出るかもしれないが、今度は (14) で定義された σ'_z が元のパウリ行列 σ_z と同じ形で表されるだけで、殆ど意味がない。

要するに、同じことを「物理量の変換」と見るか、「(逆向きの)座標の変換」と見るかの違いであり、上のように違いを意識しなくても支障はない場合もある。しかしながら一般には、物理量を行列形で、状態を列ベクトル(または行ベクトル)の形で書くときは、その成分を与えている基底が何であるかがあいまいになり、頭が混乱することがある。事情のよく分っている人が書いた教科書では、こんなことをいちいち断ってはいないので、一度は注意深く確かめながら読み進む方がいいだろう。